
魔王子復讐記

おかむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王子復讐記

【Nコード】

N5383Y

【作者名】

おかむ

【あらすじ】

魔王サタンが倒され存亡の危機に立たされた魔族。

正義と悪、魔族と人間、相反する二つが交じり合って混沌とした世界を舞台に魔族の再興と勇者への復讐を果たすべく、残された魔王子ルシファアの旅が今はいよいよ

深まる謎？真実の答え？分からない事だらけでも歴史は止まってくれない。

友との出会いと別れを繰り返し、果たしてルシファアは勇者への復讐を果たす事が出来るのか？

復讐系ファンタジー。

001（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点が在るやもしれません。

↓指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のものです。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

「カンヘル。右前方、注意！」

「御意。」

ルシファアの言葉にカンヘルは応えると、拳を前に突き出して突進してきた衛兵を弾き飛ばす。

「ルシファア様っ。」

後方より突進してきた長槍兵を素早い一撃で牽制したニヤルは再び距離を取って、周囲を警戒する。

ここは ゴルディアンゴルディアンの森。

かつては 古種ゴブリン族 の聖地として栄えた地はあるが、人間の前線支援基地があるために、周囲の廃墟とは違い、衛兵達が駐在していた。

「しかし、ここまで多いとは。」

「弱気だなんて珍しいにや。」

「なっ！？弱気などではない。」

カンヘルとニヤルのやり取りには反応せず、ルシファアは詠唱を破棄し右手を衛兵達に差し向ける。

同時に周囲を取り囲んでいた衛兵達が青白い炎に包まれた。

ポチャノボン は任意の対象を青白い炎で包む初級魔法だ。

断末魔の叫び声を上げて地面をのた打ち回る衛兵達を見ながら、ルシファアは背中の大剣を引き抜いた。

そして躊躇無く刃を突き立てていく。

叫び声は途絶え、次に鮮血が地面を赤黒く染め上げていく。

ルシファアが無尽蔵に思える程の魔力を有しているとはいえ、万が一の危機に備えて魔力を節約することは重要であった。

とは云ってもルシファア程の魔力をもってすれば初級魔法の一つや二つでは、その顔色一つ変える事さえあり得ないわけだが。

「前方より弓兵！」

「了解っ！」

「はいにやつ！」

それに万が一魔法が使用できない状況になったとしても、今のルシファーにはふたりの友がいる。

「防御結界 イージス ツ！」

両の腕を前方へと向け構え、魔法結界を発動した鎧の戦士はカンヘル。

岩の体と温厚そうな眼差しを持つ大柄な男で、ルシファーとは旧知の仲である。

種族は 岩人族。

大柄な体躯で敵の攻撃を一手に引き受ける強固な防御能力を持ち、かつての戦場においては不沈要塞の異名を誇っていた。

「……遅いにゃ！」

そのカンヘルの防御結界で弾かれた矢を見て怯んだ弓兵達の隙を、猫耳の少女が突く。

近接戦闘の備えを持たぬ弓兵達は仕方なくその手に持った弓を振りかぶるが、彼女は構えた刃で、駆け抜けざまに斬り捨てた。

黒い尻尾を風に漂わせる小柄な少女はニヤル。

ルシファーの事を様付けで呼ぶ彼女もまた、ルシファーの友人である。

種族は 猫耳族。

小柄な身体と素早い身のこなしを特徴とし、その動きは二足歩行が可能な魔族では地上最速とも云われる。

その二人の動きを見ていた、ルシファーは再びゆっくりと前進する。

ルシファーの種族は 魔人族。

魔族最高とも名高い魔力と明晰な頭脳を誇り、数多の大魔術師を輩出している。

中・遠距離戦闘では魔法、近接戦闘においては魔剣と呼ばれる魔力で強化した固有の武器を持って敵を殲滅する完全な魔法攻撃特化

種族だ。

だが魔法攻撃に特化した種族の宿命として物理防御力は心許無い。カンヘルの頼りがいのある岩の皮膚はともかくとして、ニヤルのような素早い身のこなしもルシファーには出来ない。

かと云ってルシファーがカンヘルのような全身鎧を着けることは無い。

魔人族の辞書に「防御」の言葉は無い。

数多の戦場における彼らの先祖からの教訓は「殺られる前に殺れ」だ。

だからと云って物理防御力に乏しいルシファーが戦場で孤立する事は望ましくない。

いつ敵の奇襲を受けるか分からない上京を考えると、背後からの奇襲を警戒しながらカンヘルやニヤルと一定の距離を離れずにいる方が得策である。

勿論この ゴルディアン の森 はそこまで重要性の高い前線支援基地があるわけではない。

現れる衛兵達もルシファーに奇襲を加える程の手だれや高度な魔法を駆使する魔法使いなどではない。

ルシファー達三人はそれぞれが一軍の将を務める程の高位の魔族だ。

尤も今やその一軍すら存在しないのが魔族の現状ではあるが。

いくらルシファーの物理防御力が低いとは云え、これだけ実力の差があるとそうそう奇襲を喰らうようなこともない。

そもそも、カンヘルは敵が多いと云うが、三十程度の一般兵など、三人の内誰だって、一人で殲滅する事が出来る程度の数である。

(とはいえ、この程度の兵だからだが。)

先ほどから、口では余裕を見せているカンヘルやニヤルだが、その表情はどこかこわばっている。

戦闘、そして殺傷というのは恐ろしいものだ。

いくら優れた肉体と能力を持っていて、圧倒的に有利に戦闘を進め

られるとはいえ、敵と対峙するのは恐怖と緊張感を伴う。

襲い来る兵士も、それを受け止めるのも、そしてそれを殺すのも、全て自分自身で為さねばならない。

前線でそれらに対処し、止めを刺すというのは、想像以上に精神力を要する。

それらを乗り越えるためには、場数を踏むしかないだろう、というのがルシファアの出した結論である。

「右方っ！」

「了解っ！」

焦りの表情で汗を滴らせながらも、ルシファアの声に素早く反応して、カンヘルは右腕を叩き付けた。

その一撃は、当たり前こそしないものの、長槍兵への牽制にはなったようだ。

身の丈ほどの長槍を構えた衛兵は、動揺とあからさまな敵意が入り混じった眼差しを向けながら、二歩程後退し距離をとった。

この一撃もそうであった。

ルシファア達は一軍の将を務める程高位の魔族だ。

本来であれば、こんな前線支援基地の衛兵程度の相手に攻撃を失敗するなど、考えられない。

こんな所にも、経験の不足が見て取れる。

身体と能力がいくら高位の戦士であっても、今はその力を充分に発揮出来ていない。

「マイシユテルンッ！」

それなら確実に敵を殲滅出来る術を選ぶべきだと考えたルシファアは、広範囲に効果のある魔法を詠唱した。

マイシユテルン は任意の対象の動きを鈍くする凍結系中級魔法だった。

周囲を囲んでいた衛兵達の身体の一部が氷漬けになる。

とはいえ、致命傷には至らない。

そもそも凍結系魔法は攻撃よりも妨害に向いている魔法が多く、

大きなダメージは与えられない物が多い。

その証拠に、ルシファアの放った魔法を喰らった衛兵達は動きこそ鈍ってはいるが、その敵意は確実にこちらに向いていた。

「さすが我が主。おりゃああああ！」

動きが鈍った衛兵達をカンヘルが両の腕を振り下ろし、地面に叩きつけていく。

「感謝するにや。ハアツ！」

残った敵もニヤルが素早い一撃で斬り捨てて行く。

倒れていく衛兵達の断末魔とは対照的な二人の明るい声が響く。

戦争の経験の無いルシファア達にとって、まだ難しい戦闘だがその能力差は明確だ。

その動きが鈍ったとあれば、あとは接近して、一撃を見舞わせるだけである。

「フンツ！これで十五人目。」

「こつちは十七人目にや。」

「ぬっ……やりますな、チビ猫殿！？」

「チビ猫って云うにやー！でくの坊っ！」

元来、暗い事を考える二人ではない。

温厚で忠義に厚くタフなカンヘルと、そのカンヘルを軽口と冗談で手玉にとるニヤルだ。

きっかけとちよつとした手助けがあれば、次々と衛兵達を倒し始める。

ルシファアの狙いは最初からこうだった部分にあった。

あとは二人が止めを刺し損ねた敵に、背負った大剣を突き立てていくだけでいい。

今相手にしている敵はルシファア自身が強力な攻撃魔法や大剣を開放して攻撃を加える必要はない。

考えて見ればなんということなく、それはこれまでの修行と教え通りの基本的な戦闘に違いなかった。

（しかし、どこまでこの力を使わずにいけるか。奴はこの程度の雑

兵とは格が違う。奴だけではなく、他も侮れない。」

ルシファアはそんなことを考える。

「ハッ！私の獲物だ！」

「あげないニヤ！」

戦場とは思えない楽しそうな声。

カンヘルもニヤルもルシファアが目的を果たすために行動を共にする旧知の友だ。

今まで厳しい修行をこなしてきた彼らならきっかけさえ掴めば、躊躇や戸惑いは消える。

「これで、最後ですか？」

カンヘルが両の腕で衛兵を地面に叩き付けて尋ねる。

ルシファアが考え事をしている間に戦闘は終結していたようだ。

ルシファアはその言葉に頷きながら、両手をカンヘルとニヤルに向ける。

「ああ。情報によればこの前線支援基地の兵員は五十四名。こいつで最後だ。」

ルシファアは詠唱を破棄し初級回復魔法 ヒルン を発動する。

カンヘルとニヤルは殆ど攻撃を受けていないが、念には念を入れた形だ。

「いっぱい倒したにや。」

ルシファア達は初陣に勝利した。

ルシファアは最初の戦場としてこの ゴルジディアンの森 の前線支援基地を選んで正解だったと思う。

たった数度の戦闘の中で、これ程格下の相手に対し幾度も攻撃を失敗した。

後半は完璧とも云える戦局の展開に成功したが、最初から中規模以上の拠点や基地を襲撃していたら戦況は変わっていたかもしれない。

幸い、陽はまだ高い。

「今日はここでキャンプにしよう。」

前線支援基地だけあって、ここで一夜を過ごすには充分すぎる備品や食料があった。

「ニヤルは一応周囲を警戒してくれ。カンヘルは寝床の準備。俺は料理を。」

「了解。」

「わーい！ルシファア様の手料理だにゃ！」

カンヘルは基地という名の木造の建屋に入り使えそうな寝具を探す。

ニヤルはルシファアの手料理に歓喜しながらも、身を低く構え周囲の警戒に当たる。

ルシファアは厨房を拝借しシチューを作る。

三人の旅は始まったばかりだが、なんにしろ彼らにとっては最初の勝利であった。

それは彼らの壮大な目的に比べれば小さな事に過ぎない。それでも今宵ばかりは楽しくありたいと願うのであった。

「ルシファア様ー、おいしいですよにゃ。」

猫舌のニヤルは頬を赤らめ、シチューを冷ましながら頬張っていた。

「うぬ。さすが我が主。誰かさんとは大違いだ。」

大食漢のカンヘルは今宵も匙の勢いが止まらない。

「おい！そのでくの坊……その誰かさんとは誰のことにゃ！」

「心当たりがあると云うのなら、それで正解ですよ。」

「なんにゃとー！貴様、レディーに向かつてにゃんと失礼にゃ！」

「レディー？果てさて……どちら様の事でしょうか？」

「にゃにゃにゃにゃー！」

ルシファアは二人の応酬を横目にシチューを頬張っていた。そして思い出していた……。

あの夜の出来事を。

旅立ちと大いなる復讐を成し遂げる事を決意した夜の事を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5383y/>

魔王子復讐記

2011年11月17日03時30分発行